



奏

SOU

Vol.49 Spring 2018

インタビュー:

ヘーデンボルク・直樹

チェリスト(ウィーンフィル/アンサンブル・ラロ)

音楽の学び舎:

同志社女子大学

音楽文化の源:

富山県高岡文化ホール

欧州弦楽四重奏界を支える人々

音楽ジャーナリスト: 渡辺和

日下部吉彦さんと室内楽フェスタ

室内楽は「合わせる」ことを目標にするのではなく、自分に正直な音を奏でることが大切。



神戸大学国際文化研究科棟にて



左:藤野一夫さん 右:ヘーデンボルク直樹さん



「アンサンブルラロ」 神戸国際芸術祭2017 12月9日 あじさいホール

現在ウィーンフィルのメンバーで、神戸大学教授の藤野一夫氏がプロデュースする「神戸国際芸術祭*2017」に、ピアノ四重奏団「アンサンブルラロ」として参加されたチェリストのヘーデンボルク・直樹氏を招いて、藤野氏が室内楽に関する興味深いお話を伺いました。様々な角度から室内楽を捉え、日本とヨーロッパとの違いやその歴史、教育法などについて大いに語って頂きました。

音楽教育の観点から見ると、室内楽は重要視されています。——ヘーデンボルク

藤野 本日はお忙しいところ、有難うございます。まずはヘーデンボルクさんの生い立ちからお聞かせ願えますか。

ヘーデンボルク オーストリアのザルツブルグ生まれで、父はスウェーデン人、母は日本人です。母がピアニストだったので、四、五歳の頃からピアノを

弾いていました。父がモーツァルト管弦楽団でヴァイオリンを弾いているのを見て、兄の和樹はヴァイオリンを始めたので、私もしたかった。そして、母が三人もヴァイオリニストは困ると言い、ピアニストである母はチェロを弾き始めたんです。私はその練習に一緒に通っていたので、ずっとチェロを聞いていました。それで、自然にチェロを好きになり、そうした環境の中で、自分もチェロを

即興で思い描いて奏でることが出来る塗り絵の世界のような気がします。——藤野

藤野 とここで、レコーディングが普及する以前、シンフォニーはどのようにして伝えられていたのでしょうか。当時シンフォニーコンサートは誰でも行けるものではなかっただろうし、どのようにして傳承されて



藤野さん

いったのか、非常に興味深い。その傳承に関して、ハウスミュージックや室内楽が大きな役目を果たしたのではないかと思うのですが…

ヘーデンボルク 古くからウィーンにはサロン音楽がありましたし、交響曲も室内楽版で伝えられていったというのはあるかもしれませんね。アインシュタインは名ヴァイオリニストだったといわれていますし、今でも、医者や弁護士士の教育に音楽は組み込まれています

弾くようになりました。六歳から、チェロの先生について、十二歳で音楽大学の予備科に入學。十三歳の時、チェリストであり指揮者だった巨匠ハイน์リッヒシフ先生と出会い、人生は大きく変わりました。十七歳からは先生と共にウィーンに移り、二十一歳までウィーンの国立音楽大学でレッスンを受けてきました。

藤野 日本では中学・高校は普通科で学び、その傍らで個人的に音楽を勉強して音大に入るのが一般的ですが、ヨーロッパはコンセルヴァトワールなどもあり、子どもの頃から、かなり本格的に音楽を学ぶ環境がありますね。モーツァルトでもそうだったのですか？

ヘーデンボルク オーストリアには、私立の音楽学校がたくさんありますし、誰でも受けることができます。私も六歳で入学し、モーツァルト管弦楽団のソロチェリストに学びました。大学の予備科は入試さえ受ければ何歳でも入れますが、正式な学生になれるのは十五歳から。だから私も

十五歳で正式な学生となり、副科もスタート。途中でウィーンに移ったため、ギムナジウムは十七歳で辞めました。

藤野 なるほど。音楽の才能は早くから芽生えますから、十代からデビューする人も多いですね。

ヘーデンボルク そうですね。私は十二歳でソリストデビューし、多くのコンサートに出演しました。もちろん、義務教育は大切ですが、ドイツのギムナジウム制度は、エリート高校なので内容も濃く、特に厳しいです。演奏会などで学校に行けない時は、よく図書館の本で勉強しましたね。日本語もミュンヘンの日本語補習校に毎週土曜日に通って覚えました。



ヘーデンボルク直樹さん

藤野 日本は弦楽器やピアノは個人レッスンを受けて、音大に行くのが一般的で、オーケストラや室内楽の練習はするけ

PROFILE

敬称略

【藤野 一夫】(インタビュアー)

1958年、東京生まれ。神戸大学大学院国際文化研究科教授。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー。文化経済学会理事、文化政策学会副会長、(公財)びわ湖ホール理事、(公財)神戸市民文化振興財団理事、(公財)神戸文化支援基金副理事長、日本ワーグナー協会理事。専門はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学。近著に「ワーグナー 友人たちへの伝言」(法政大学出版局)、「公共文化施設の公共性」(水曜社)、「行政改革と文化創造のイニシアティブ」(美学出版)、「地域主権の国 ドイツの文化政策」(美学出版)。日経新聞等の音楽批評を担当。

【ヘーデンボルク・直樹】Bernhard Naoki Hedenberg (チェリスト)

オーストリア・ザルツブルグ出身。12歳でモーツァルト管弦楽団との共演でソロ・デビュー。13歳からハイน์リッヒシフの下で研鑽を積む。1993年「若い音楽家のための国際チェロコンクール」(伊)優勝、1995年「第2回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクール」(仙台)銀メダル等。2003年バイエルン放送室内管弦楽団とのハインドンのチェロ協奏曲でウィーン楽友協会大ホールにデビュー。2007年にはアイゼナハ劇場(独)のツリストイン・レジダンスを務め、音楽総監督の飯哲朗と共に演奏を行った。ウィーン・トーン・キュンスラー管弦楽団首席チェロ奏者を経て、2011年にウィーン国立歌劇場管弦楽団に入団。2014年よりウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の正団員となる。2006年より神戸国際芸術祭の音楽顧問を務める。

*神戸国際芸術祭は、チェロ奏者のヘーデンボルク・直樹と音楽学者の藤野一夫の提唱により、2006年に始まった室内楽中心の音楽祭で、12年間続いている。(公財)神戸市民文化振興財団と神戸大学が連携。初年度から参加しているピアノ4重奏団アンサンブルラロを中心に、内外の気鋭の音楽家をゲストに招いている。市民ボランティアの育成やアートマネジメント教育にも力を入れ、子どものためのコンサートなど、関西における室内楽の普及に貢献している。

から、楽器をたしなむ人は少なくないです。今おっしゃったハ
ウスミュージックにも、クアルテッ
トやトリオ、ピアノを加えた室
内楽は盛んだったと思います
し、現代でも仲間内で集まって
演奏会をしたり、サロンコン
サートを開いたりという習慣
は根付いています。

藤野 もう一つ興味があるの
は、十八世紀の後半、ハイド
ンが大活躍していた時、シンプ
ォニーやオペラなど、様々なジャン
ルの曲を書きましたよね。その
中にピアノトリオの曲もあつ
た。さらに十九世紀には、交響
曲や協奏曲のピアノ三重奏版
が多く出版されました。まだ
録音がなくてシンプォニーコン
サートにも簡単に行けない時
に、室内楽として親しんだのだ
と思います。

ヘーデンボルク そうですね。
有名なハイドンですが、ペー
トーヴェンだって、彼が生きてい
る時代に出版された楽譜があ
ります。シンプォニーにはすべ
て室内楽版というのがありま
す。ピアノクアルテット版でエ
ロイカもありますし、ピアノトリ

ダクションして演奏した室内楽
もある。それからアマチュアが
教養や趣味の延長として楽し
む室内楽もあつて、ヨーロッパに
は古くからいろんな可能性や
世界が広がっていて、ウイーンに
は今もそれが残っている。素晴
らしいですよ。逆に日本の現
状はどうかというと、オーケス
トラの演奏会は年間二千回程
度ありますが、それにくらべら
ると室内楽の演奏会は非常に少
ないと思います。

ヘーデンボルク ヨーロッパで
も音楽普及に関して書かれた
シンプォニーを聴ける機会は、
ごくまれだったと思います。当
時、ブラームスやブルックナーも
一回弾いて終わりだったことも
あるわけですから。でも、音楽
を多くの人に広めたいという
のは、当たり前ですよ。ベル
ク、アルバンベルクなどがいろ
んな編曲作品を残していて、当
時流行っていたハーモニウムが
管楽器の代わりに和声を出す
編曲も多くあります。いずれ
にしても演奏にはピアノが必
要ですから、大きな家にはピ
アノがあり、そうでないところ

オ版では他の作曲家のシンプ
ォニーもありますよね。録音が
なく、ラジオもない時代は、家
庭では自らが音を出さなけれ
ば音楽はないわけです。一番手
軽にできる音楽は歌うことで
すから、音楽に触れる順番と
しては、まず歌があり、次に楽
器の勉強、それからハウス
ミュージックや室内楽、そして、



シンプォニーになると思いま
す。オーケストラというジャン
ルは公式の場の音楽ですから、
音楽の構造がわかりやすく、
ハーモニもあまり不協和音
はなく大衆にわかりやすいと
いう特長がある。そういう
オーケストラの一番の醍醐味は
音色だと思えます。なぜ音
色かということ、作曲家は楽器

はアップライトがありました。
そのアップライトの普及が突
然終了したのは、ラジオが普及
したからだそうです。

藤野 そうなんですか。
ヘーデンボルク ラジオの普
及により、家庭で音楽が聴け
る。そうなった時に、自分たち
で音楽をしようというアク
ティブな姿勢が弱まったのかも
しれません。それは残念です
よね。今ではラジオだけでな
く、インターネットで音楽や楽
譜のほとんどが手に入ります
よね。そういう時代になると、
音楽を演奏しようという意欲
が減少するように思います。

「オーブンチェンバーミュー
ジック」と名付けているん
です。――ヘーデンボルク

藤野 残念なことですよ。
ヨーロッパでは、ソコからオー
ケストラのリーダーになるケー
スもありますが、日本の場合は、
そうしたことは少なく思いま
す。ドイツで毎日オーケストラ
を聴いていて、帰国した時に感
じたのが、日本のオーケストラ

それぞれの音色を生かした
オーケストレーションを、私た
ち演奏者に託しているの、交
響曲は一番音色が楽しめるか
らです。音楽を勉強する場合
には、曲の構造自体に対して
作曲家の解釈が付いてくるた
め「この部分はこんな音で聴き
たかったのか」と理解できま
すし、室内楽やソリストで楽器を
変えず一つの楽器で多様な音
色を出す人にとっては、逆戻り
してその作曲家の考え方が理
解できるため、スコアの勉強は
とても楽しいと思います。

藤野 バロック時代、ルネサンス
時代までさかのぼると、三声や
四声になると音符は並んでい
ても楽器の指定がないのもあ
りますね。それは、演奏者が
即興で思い描いて奏でること
ができる塗り絵の世界のよう
な気がします。

ヘーデンボルク そうですね。
音楽のハーモニは、倍音を基
にした和声で作られるものな
ので数学的な世界であつて、曲
の構造自体はゼロから始まつて
どんどん高まっていくので建築
的だなと感じています。そうい

は体を大きく使つて演奏する
部分に欠けていて、伸び伸びと
演奏できていないということ。
こじんまりとまとまった日本
の社会の縮図のような印象を
受けてしまいました。相手の
空気を読んで合わせるけれど
も、自分の主張が少ないように
感じました。それを指揮者
が解放すればよいのだけれど、



なかなかそうはできない。日
本のマイナスの集団主義が
オーケストラに顕著に現れてい
るように思いました。

ヘーデンボルク オーケストラ
奏者全員が室内楽奏者を超
えて、オーケストラになりきつ

う風に考えると構造そのもの
は、どの楽器でも表現できるの
ではないかと。それを音色指
定することで、何百年もかけ
てどんどん詳細になり、情報
がすごく多くなつてきます。

作曲家に小編成の曲を大編成
に編曲してほしいというお願い
すると大歓迎されます。それ
は作曲家としての創造力を膨
らませ、自由に楽器を割り振
ることができるから。でも、大
編成の曲を小編成にするのは
敬遠されることが多い。多様
な情報があふれるものを削ぎ
落していくので、作曲家として
はつまらなく感じるのではし
ょうね。室内楽で演奏される交
響曲は、作曲家自身が作った
ものもあるけれど、出版社な
どが楽譜を広めるために作つ
てもらったものも多いのだと思
います。

藤野 様々な要素があると思
いますね。ペートーヴェンの時代
に弦楽四重奏が精度を増し、
弦楽四重奏でなければ表現で
きない深みの世界に達します
よね。それと同時に、自分たち
でまず音を出してみようと

ていれば、こじんまりとまとま
ることはないのかもしれない
んね。最近感じるのは、室内楽
は合わせることで自体、元々間
違つているのではないかと
こと。室内楽の特殊な部分は、
各パートをそれぞれが責任
持つて演奏することだと思
うんです。オーケストラでは複数
の奏者が各パートを音でコー
ラス化しているから、グループ
で一つの音を作らなければなら
ない。だから、合わせる必要が
あるし、それぞれにリーダーも
必要。でも、室内楽において重
要なのは「合わせない」という
ことだと。何故かということ、同
じ音色を奏でるのは結果で
あつて目的ではないからです。
感覚的なものや背景、演奏法、
音のイメージ、音色、演奏家の
能力、芸術家のイメージ、体験
など、すべてを共有した結果
として、タイミングが合うのは

良いけれど、自分にとって正直
な音を出さずに、合わせるた
めに音を出すとしたら、それ
は嘘になる。それに、合っている
だけではつまらないし、音楽家
としてはその音を出した意味

がないし、無駄な音になってしまっているのではないのでしょうか。その瞬間に無駄のない音を出しながら、自分に嘘をつかず、本物の音を出して、それで四人のタイミングが合うというのは、同じ音楽観の中で同じく音楽を理解し、演奏法までがびつたり合ったという結果で、理想論ではないのだと思います。

藤野 なるほど。

ヘーデンボルク また、ピアノが入った室内楽はスケールの大きなものと例えて「オープンチェンバーミュージック」と勝手に名付けています。人を加えたり、ソリスト同士で組んだり、初めてのメンバーで弾いても音楽として成り立つ、そんな優れた室内楽なのではないかと考えています。もちろん、気心知れた仲間と長年弾けば、それはどんどん発展しますし、そういう意味ではピアノトリオは弦楽四重奏に近いと感じますが…。

藤野 ピアノトリオと弦楽四重奏は、それぞれ完結した世界で、その世界観を突き詰めていくという印象がありますね。

と根付かせて発展させるためにはどんなことが考えられると思いますか？



ヘーデンボルク 以前、日本だけで音楽教育を受けた方とコラボレーションした時、日本には素晴らしい先生がいるのだと実感しました。海外で音楽の勉強をし、技術を高めるのが理想かもしれませんが、こんなに素晴らしい演奏家が存在するわけですから、日本の先生のレベルはかなり高いと感動しました。また、ネットからいろいろな情報が一瞬で手に入るようになって、知識としてのグローバル化は着実に進んでいます。マーラーの有名な言葉で「伝統とは火を伝えることではない」とありますが、これは何かを守るのではなく、その時々アイデアを発展させなくてはいけないことだと



ベートーヴェンの弦楽四重奏は、恐ろしいようなところまで自分の内面を掘り下げていきますよね。第九の大衆に向けた演説とは全然違う世界だと感じます。しかし、これがピアノ四重奏の「オープンチェンバーミュージック」となると、そこにはもつと人が加わって、さらにスケールの大きなシンフォニーに近い世界観ができてくる。ピアノ四重奏を「オープンチェンバーミュージック」と表現するのは、面白いですね。新しい楽器が加わることで新しい「オープンチェンバーミュージック」の世界が拓かれていく。これはすごくユニークなことだと思います。

新たな融合を試みる理想的な交流だと思っています。—— **藤野**

ヘーデンボルク 現在、私は様々なジャンルの音楽に触れることができます。日本の音楽界において、そうしたことが確立しつつあるように思いますし、じつくと西洋音楽が根付いていくように感じますよ。

日本人は聴くことの集中力に優れていると思います。—— **ヘーデンボルク**

藤野 これまでの私たちの取り組みでは、子どもという存在を大切にしてきました。感性を育むには子ども時代の教育が重要だし、素晴らしい音楽経験をすれば、途中で音楽を止めたとしても、数年後かに蘇るのではないかと。だからこそ、子どものためのコンサート開催は重要だと考えています。ものの捉え方の枠組みが固定してしまう前に、子どもたちの感性を開いて磨き、一層深めていきたい…。

ヘーデンボルク そう思います。それには両親の力も必要ですよ。私たちは幼稚園や小学校で演奏をしますが、親が日常の中でクラシックに触れる時間を作ってやれるか

れる状態で、とても恵まれていると思つています。まず、国立歌劇場のオケピットで弾いているオペラの世界。そして、ウィーンフィルのシンフォニックな世界。ここでは、マーラーやブルックナー、ワーグナー、リヒャルトシュトラウスなど、オーケストラに入団するまでは触れることのできなかつたものにも関わっています。また、室内楽も十数年続いているアンサンブルラロで演奏することができていますし、新しい試みとして、兄弟でヘーデンボルクトリオも結成。これはピアノ三重奏の世界です。

藤野 素晴らしいですね。

ヘーデンボルク 兄弟でのピアノ三重奏は結構心地良いので、クアルテット好きの兄と共に準ウィーンフィルメンバーによるクアルテットも結成。日本での初演奏会とCDの録音も計画しています。ウィーンフィルの創設者ニコライの名前を借りて「ニコライ・クアルテット」と名付けました。

藤野 そうなんです。

ヘーデンボルク ウィーン国立

どうか。理想としては演奏会に行つてライブの楽しさを感じてもらえれば良いのですが、ラジオやネットでも良いので、音楽に触れる機会を増やすことで大きく変わると思います。

藤野 そうですよ。

ヘーデンボルク また、日本人は聴くことの集中力に優れていると思います。ウィーンフィルのメンバーともよく話すのですが、聴くことと環境が完璧に整っていると。そして、奏者にも最高の待遇で最良のホール、優れた指揮者による秀逸なプログラムを与えてくれる。だからこそ素晴らしい演奏ができるのだと感じます。この聴く集中力には室内楽がベスト。日本の聴衆は細部まで聴けるので、クアルテットが溶けるように和音を演奏していても、二つの音を聞き出せるのではないかと感じるほどですよ。

藤野 確かに分析的にも聴けるかもしれないですね。

ヘーデンボルク 一音も逃したくないという集中力は、素晴らしいです。ゲーテは弦楽四重奏を「賢者の対話」といつてい

オペラ座で共に演奏し、年に百数回一緒に公演している仲間とのクアルテットで、ベートーヴェンなどに取り組むのも新しいチャレンジなんです。また、神戸国際芸術祭も十二年間続けてきました。ここでは私のバイリンガルという部分を生かして、日本とドイツ圏との橋渡しの役割が出来たらと考えています。積極的に日本の音楽家とコラボレーションして、良いものを作っていく。それがベストではないかと考えています。そうした全体の動きの中で「オープンチェンバーミュージック」としての室内楽を今後も続けていきたいと思っています。

藤野 日本国内でトップクラスの演奏者やウィーンフィルからも演奏者を招くなど、この十二年間で様々なチャンネルをされましたよね。ウィーンという音楽の伝統文化の中で育つた演奏家や日本で音楽活動をする演奏家に出会いを与え、新たな融合を試みる理想的な交流だと思っています。そこでお伺いしたいのですが、日本で西洋音楽の歴史をしっかりと

ますが、室内楽は気心の知れた者同士など、たくさん共通点のある人たちが、複雑に入り組んだ感覚的なものを共有できる場だと思っています。内面に燃えたいような熱情がある室内楽に触れることで、他では感じる事ができない豊かさや芸術的な体験ができると思います。室内楽は瞬間芸術だからこそ、本当にうまくいくかどうかはわからない。でも、聴けば聴く程楽しくなるので、室内楽に触れる機会をたくさん作っていただきたい。そして、そういう場を与える日本室内楽振興財団も、今後とも益々発展していただきたいと思っています。

藤野 本日は有難うございました。



同志社女子大学



同志社女子大学 学芸学部音楽学教授
権名 亮輔

【権名亮輔（しやうすけ）プロフィール】
東京大学大学院博士課程満期退学。二工科大学哲学科博士課程修了。東京大学助手、バリ第三大講義、リール第三大講義をへて、現在は同志社女子大学教授。著書『三ツツラック・セヴラック―南仏の風・郷愁の音画』アルテスパブリッシング（二十回吉田秀和賞受賞。その他の著書に「音楽的時間の変容」現代思潮新社、「狂気の西洋音楽史」岩波書店）などがある。

伝統の京都から新しい音楽を発信する

同志社女子大学は京田辺市にある。行政区分上は京都府だが、実感としては京都と奈良の中間地点である。初めてこの地に足を踏み入れたのが、二十世紀も終わりになろうという二〇〇〇年十二月だった。当時はリール第三大に、ポストク用のA.T.E.Rというタイトルで勤めていたのだが、フランスでの専任職を得る多大の困難さに辟易していたので、ネット公募情報で手当たり次第に日本の職に応募していたところ、早稲田大学と同志社女子大学が面接をしたいといってきたのであった。

うな、と思ったのだが、あにはからんや、早稲田には断られ、同志社に来ることになり、十八年後の今でもここに勤めている。あとで聞くところによると、早稲田では塚原史先生が推してくださったのだが、教授たちの間の勢力争いに負けたのだという。当時、同志社女子大学音楽学科には音楽学担当として、シルヴァン・ギニヤール先生と幣原映智先生がおられて、おそらく彼らが私を入れてくれたのだと思う。

えて街も発展しつつある。元来、同志社女子大学は、一八七五（明治八）年に同志社英学校を設立した新島襄の妻、新島八重が、アメリカ人宣教師アリス・スタークウェザーとともに、一八七六年、京都市内の御所の中に「女子塾」を開校したのである。同志社大学ともどもキリスト教主義の学校であるので、当初から音楽は重視されていたらしいが、第二次世界大戦後正式に大学となったときに、学芸学部として英文学・音楽・食物学の三学科体制でスタートしている。京都市内御所の北、相国寺の土地を借りている今出川キャンパスが手狭になり、田辺にキャンパス開設、音楽学科が移転したのは

一九八六年とのこと。しかし、現在も歴史ある今出川キャンパスも健在で、表象文化学部と生活科学部がある。



顕啓館外観

わざわざ何も無い田辺に音楽学科が移転するのだから、当時の音楽学科教授陣はそのときの最高レベルの建築を要求

したらしい。田辺キャンパスでも音楽棟（「顕啓館」という）は特別仕様で、四階建ての中心に二階から三階までを使って四百名収容のホールがある。木材の質感を生かした暖かい雰囲気ホールだが、その



顕啓館ホール



ほかはすべてヤマハでC7からアップライトまでそろっている。教員としては、各研究室に二台ずつグランドがある（ピアノ科の先生には二台）のがあります。私が所属しているのは、演奏専攻と音楽文化専攻とあるうちの後者である。演奏専攻には

声楽・鍵盤楽器・管弦打楽器の各コースがある。レッスン中心のいわゆる音楽大学的な教育内容であるが、単科大学ではない総合大学のうえに、大学全体のモットーが「キリスト教主義・国際主義・リベラルアーツ」なので、

実技にかたよらない幅広い学習をさせている。音楽文化専攻には、以前にあったコース制を廃し、「ミュージックスタディーズ・ミュージックエデュケーション・ミュージックセラピー・サウンドデザイン」（それぞれ音楽学・音楽教育・音楽療法・コンピュータを使う／使わない作曲）の四つの軸を中心にゆるやかにまとめた教育内容を作った。三年次生まではどんな科目をとってもよ

いが、四年次にある卒業研究では四つの軸のどれからのゼミに所属しなければならぬ。こちらの方は、学問研究だけではなく、演奏や実践も大事にしたいというところから、楽器実技

レッスン（いわゆる「副科」）を四年次生まで履修可能にした。

音楽文化専攻には、そのほか実技系科目として「合奏」というものがあり、室内楽を学んでいる。近年、中高で吹奏楽にクラブなどで参加して音楽に目覚めた学生が多くなり、そのような学生たちに人気の科目だ。演奏専攻には、そのものずばり「室内楽」という授業が二年次から四年次まである。そのほか



オーケストラコンサート2016

「学内演奏」や「音楽によるアウトリーチ」など、室内楽も含めた演奏実践の機会を多く作っている。後者の授業は音楽文化の学生も参加可能である。



オペラ公演2015

一般の学外向け活動として大規模なものに、オーケストラの演奏会（田辺キャンパスで行われる「オーケストラコンサート」と学外ホールで行う「定期演奏会」とオペラ公演がある。どちらも舞台上に乗るのは演奏専攻学生だが、音楽文化専攻学生もプログラム制作や広報などさまざまな面で関わっている。とくにオーケストラは女性だけのフルオーケストラなので、これは特筆すべきであろう。

富山県立高岡文化ホール



富山県高岡文化ホールは、昭和61年10月に、高岡市を中心とした県西部地域における広域的な芸術文化振興を図るための中核的な拠点施設として、富山県内では、富山市内の富山県民会館と富山県教育文化会館に次ぐ3番目の県立ホールとして、高岡市中川園町の富山大学工学部跡地で開館し、昨年、開館30周年を迎えました。

施設概要及び平成28年度の利用率は、次のとおりです。

施設	施設概況	28年度利用率
大ホール	703席 間口16m、奥行16.5m	72%
多目的小ホール	迫り機構2基、椅子席最大300席	78%
練習室(3室)	47㎡(2室)、136㎡(1室)	91%
スタジオ(1室)	68㎡ 防音設備	85%
会議室(4室)	学校式27名(2室)、54名(2室)	33%
和室(3室)	17.5畳(3室)	42%
ギャラリー(1室)	185㎡	50%

※利用率=利用日数/利用可能日数

富山県立高岡文化ホール

〒933-0055 富山県高岡市中川園町13-1
 TEL 0766-25-4141 FAX 0766-25-4332
 予約専用フリーダイヤル 0120-629-630
<http://www.bunka-toyama.jp/takabun/index.php>
 E-mail takabun@p1.coralnet.or.jp

当館は、貸館事業以外にも、地域住民に優れた舞台芸術の鑑賞機会や、創作、練習、発表の場を提供することで、観客や地域の文化の担い手を育成し、地域の文化活動、住民同士の交流を促進することを目的に、多彩な文化事業を展開しています。

ここで、「富山県高岡文化ホール音楽友の会」について、ご紹介します。

当会は、県民の皆様には、高岡地域において良質な音楽を身近で気軽に鑑賞できる機会を提供することを目的に、高岡文化ホールの開館を機に昭和六十二年四月に発足いたしました。

そのメイン事業は、年間一五万五千円の年会費で、年六本のクラシックコンサートを中心としたバラエティーに富んだ魅力あるラインナップでお届けする例会コンサートです。これまでに、国内外の一流アーティストから今後活躍が期待される新進アーティストまで幅広い選択肢の中から話題性や鑑賞者ニーズを考慮しながら展開

してきた結果、「高岡文化ホール音楽友の会」というブランドを創り上げ、県民の皆様が信頼して当会に入会できる環境が出来上がり、毎年多くの会員の皆様に支持されているところです。今や、高岡文化ホールの「顔」とも言える音楽友の会の会員数は、近年、約五百名前後で推移し、地域の潜在的な音楽愛好家の開拓・育成にも大きな役割を果たしています。

グランプリコンサートも、この例会コンサートとのラインナップの一つとして、平成十二年度の第三回大阪国際室内楽コンクールから開催してきております。当館がこれまで毎年継続して開催してこられたのも、会員制事業だからこそです。知名度のないアーティストのチケット販促には、事業担当者が、そのアーティストが如何に晴らしいかを県民に直に訴え、一枚一枚チケットを地道に売るしか方法はありません。その点、この友の会会員であれば、アーティストに興味関心がなくても年六本のチケットが

自宅に自動的に郵送されてくるわけですから、時間の都合さえ付けばホールに足を運んでもらうことができ、そこで最高のパフォーマンスを披露すれば、必ずや観客の心に響き、満足いただけるのです。「ホールに如何に足を運ばせるか」、これは事業担当者の永遠の課題ですが、グランプリコンサートはアンケート調査でも満足度が高く、当館としても、今後もできる限り継続していきたいと考えております。



富山県高岡文化ホール外観

欧州弦楽四重奏界を支える人々

音楽ジャーナリスト

渡辺 和

去る一月から二月初旬、欧州では弦楽四重奏を中心に据えた大規模フェスティバルが立て続けに開催された。二月十日から二十二日にパリで第八回弦楽四重奏ビエンナーレ(参加団体三十二)、二月二十五日から二十八日にハイデルベルク弦楽四重奏祭(同十三)、二月二十七日から三月三日には初開催の阿姆斯特ダム弦楽四重奏ビエンナーレ(同十九)。結成間もない若手からアルディティ弦楽四重奏団(以下Q)、ハーゲンQ、エマーソンQら長老までプロフェッショナル団体を集め、実験的コンサート、新作委嘱、公開オーディションまで含む総合イベントばかりである。隔年開催のパリと毎年開催のハイデルベルクは、二〇二六年の本誌第四十五号でもお伝えした。大きな変化があったハイデルベルクの続報と、初開催の阿姆斯特ダムの様子をお伝えしよう。

◆ハイデルベルク弦楽四重奏祭

「若い弦楽四重奏への資金提供のためのコンクール」
二〇〇六年の第二回にも参加したクスQのオリバー・ヴィレが「最初の年は聴衆が五十人しかいませんでしたよ」と苦笑するも、ハイデルベルクの弦楽四重奏祭は毎年開催され続ける。今年で十二回、いつの間にか欧州で最もコアな弦楽四重奏聴衆が集まるイベントへと発展した。弦楽四重奏団を控えさせ楽譜を投影し、

元アルバンベルクQチェロ奏者エルベンがモーツァルト弦楽四重奏の構造分析。フランクフルターアルゲマイン紙の名物音楽記者エレオノーレ・ビュニツヒが後述のコンクールで審査員を務めたエルベン、ヴィレ、第三回大阪大会優勝時のベルチャQチェロ奏者テイトと「コンクールとは何か」をテーマに繰り広げる本音トーク。パリのビエンナーレと共同で委嘱した新作も披露して終わりにせず、コンサートでの演奏以外に作曲家スリシカを招聘し

弦楽四重奏団の演奏付きでの解説、旧作弦楽四重奏も披露する。会場のギムナジウム講堂には五百人を越える聴衆が詰めかけ、午前十時から始まるコンサートばかりか、ハイレベルな内容の弦楽四重奏談



コンクールのセッション開始前に挨拶するイレーネ女史。

義に満員の聴衆が聞き耳を立て、挙手をし論者を質問攻めにする四日間が続く。そんな音楽祭に今年から新たな要素が加わった。「イレーネ・スティールス・ヴィルシング財団」コンクールだ。音楽祭初日の二月二十五日、欧州拠点の結成数年の若い弦楽四重奏八団体を集め、各団体が自由選択曲を二十分程演奏。その後メイジャー大会に匹敵する上述の審査員からの厳しい質疑に応答する。コンクールというより、助成金獲得のオーディションだ。驚くべきは、このコンクール

が一人の個人の資金提供で成されている事実。コンクールに名を冠するイレーネ女史は、「マダム弦楽四重奏」として知らぬ者なき人物である。ヨーロッパ各地やパンフのコンクールに通う純粋な愛好家が昂じ、地元ブリュッセルで演奏会を主催するようになる。今世紀に入り、ベルリンで若手弦楽四重奏団に活動資金を提供するオーディションを始める。そんな大会が、今回からハイデルベルクの音楽祭に編入された。「若い団体が仕事を始めるとき、自前のシリーズやフェスティバルが出来るか考えます。イレーネさんが提供なさる資金でプロとしてのキャリアを始められる。でも弦楽四重奏を続けるには、自分らの創造に対するヴィジョンがあればなりません。ですから私たちは、彼らがどんな音楽家であるかを知り、可能性を



イレーネ女史による結果発表前コメント。

探る質問をしたのです。」(ヴィレ)

室内楽の歴史でのみ知るクーリッジ夫人ら音楽パトロンの現代版のようなイレーネ女史だが、王族でも貴族でも、ましてや大富豪でもない。かつては某国際機関で働いた知的で穏やかなレディである。ヨーロッパ中の弦楽四重奏が母と慕う彼女は、優勝団体ばかりか二位を三団体に出した(それだけ多数の団体に奨学金を提供したわけだ)コンクールの翌日、筆者にも「結果、どう思いました?」と微笑みかけて来た。「ハイデルベルクに移し

た理由です。それはね、聴衆です。こんなに知識があり熱狂的な素晴らしい聴衆が沢山いる場所は、世界のどこにもありません。マネージャー、主催者、音楽評論家、アマチュアの弦楽四重奏奏者、弦楽四重奏に興味がある熱心な聴衆、そんな人々が出会う場所になっていますもの。」(イレーネ)

◆阿姆斯特ダム弦楽四重奏ビエンナーレ

「弦楽四重奏者を出会わせるための祭り」

阿姆斯特ダムの室内楽協会にいたヤスミン・ヒルベルディング女史からもうひとつの弦楽四重奏ビエンナーレ構想を



ムジークヘボウはビエンナーレ色だ。



ビエンナーレ芸術監督ヒルベルディング女史。

聞かされたのは、前回のパリのビエンナーレのときだった。熱心に語る壮大な計画に、現実には難しからうなあ、と思ったものだ。どれほどの努力があったか、阿姆斯特ダム弦楽四重奏ビエンナーレは実現した。それも、弦楽四重奏というジャンルに特化した音楽祭としては空前の規模のイベントとして。

阿姆斯特ダム中央駅からアイ済沿いに五分も歩く埠頭の先に、ムジークヘボウがモダンなガラス壁面を輝かせている。七百席強のメインホールと、上層階の百席の小ホール、スタジオ

オ、中央駅を臨む各階ロビーなど、弦楽四重奏のためのスペースは数多ある施設と共催しまるまる一週間フル活用、午前九時半の「アーリー・ハイドン」から深夜十時半開演の「レイト・ベートーヴェン」まで、演

奏会やマスタークラス、レクチャーなど総計五十六の催しが開催された。ドイツで最も注目される作曲家ヴィドマンの弦楽四重奏全五曲を作曲者の解説後に一気に演奏するコンサートも、午後七時に始まりカサルスQ、ダネルQ、第六回大阪覇者ドーリックQが交代に弾き続け午前一時過ぎに至るマラソン演奏も、多彩な祭りの一部に過ぎぬ。公式ウェブサイトは記録として保持されるとのことなので、個々のプログラムにご関心の方はご覧いただきたい。

(<http://www.sqban/eveningstlang=en>)

期間中も芸術監督として八面六臂のヒルベルディング女史、ほぼ全てのイベントに顔を出し、クアルテットの熱演力演名演に拍手をする姿は、イ



公開で「最初のリハーサル」を行うドーリックQ。

レーネ女史同様の「クアルテットが大好きな奥様」である。「このビエンナーレを始めた理由は、弦楽四重奏団への敬意からです。長く室内楽のコンサートを制作し、クアルテットには殆ど交流する機会がないと知りました。お互いを知り合う場所がないのです。このビエンナーレで最もやりたいのは、弦楽四重奏団に出会ってもらうこと。別のクアルテット、作曲家、そして聴衆に、です。文化遺産とも言えるこの弦楽四重奏という形態を、博物館に入れるのではなく、広げていきたい。」(ヒルベルディング)

日下部吉彦さんと室内楽フェスタ

善積 俊夫

関西学院大学卒、ヤマハ(株)心齋橋店長等(財)ヤマハ音楽振興会大阪支部長として音楽普及活動に従事、定年後社団法人日本シンク音楽事業協会の常務理事、現在参与、大阪国際室内楽コンクール運営委員、多くの音楽関係の企画制作等を担当。

一九九三年の第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの構想時から、その豊富な経験と知識で運営に対するアドバイスを頂き、長年にわたってフェスタ審査員を務められた音楽評論家の日下部吉彦さんが、昨年未逝去されました。日下部さんと共にコンクール&フェスタを草創期から支えて頂いた第9回コンクールの善積俊夫運営委員に随想を寄せて頂きました。



第3回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 記者発表
日下部フェスタ審査員長



第7回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 記者発表
日下部フェスタ審査員長と堀コンクール審査委員長

日下部吉彦さんとは、合唱を通じて知己を得、いろいろ音楽企画や制作をご一緒にできたことが、私にとって大切な財産になっています。大阪国際室内楽コンクールでは、読売テレビで当初プロデュースされた大矢寛治さんと日下部さんにお

声を掛けていただき第一回から運営に携わらせていただきました。当時、音楽家と企画・運営関係者が合同で協議し、国際コンクールの概要を固めるための会議に何度か参加した時のことを思い出します。そのころ室内楽コンクールは、海外

界にないコンクールにしたいとの思いがあり、大阪でのコンクールだから西洋音楽だけでなくアジアの音楽も参加できる部門を創ろうと提案したことを思い出します。異論もあ

りましたが、日下部さんが、名誉音楽監督をお願いしたサニーデイ・メニューインの東西の音楽の融合を理想としていることから「フェスタ部門」の設置を發議され賛同を得て、



第7回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 表彰式

今に続くユニークなコンクール部門として、世界に知られているのも、日下部さんなくしては実現しなかったのではないかと思います。この部門について、聴衆投票を提案したところ日下部さんがすぐに賛同され現在もその審査方法が継続されています。投票結果に基づき最終結果を決定する審査委員長として公正な判定をさ

れ、合わせてメニューイン金賞団体の選択には様々な要素を的確に検討し決定されていた。

日下部さんがジャーナリストとして培われた広く世界と社会を見る観点から、ともすれば保守的なクラシック音楽界にたいして、常に聴衆の拡大を、ご自身のマーケティング感性和柔軟な思考で、新しい切り口を開かれ続けられたことは皆様よくご存じの通りです。

コンサートの進行役や解説者、ナビゲーター・評論家等々舞台や記述で示された見識と話術で、多くの音楽ファンの拡がりを築かれあげられたことも大きなご功績として語り継がれることですし、合唱界へのご貢献も多大なものでした。誘われて「おかあさんカンタート」(確か審査委員長)を拝聴した時に参加者に慕われていたことも忘れることができません。神奈川テレビでの「佐藤しのお出逢いのハーモニー」の番組での司会でも広い人脈を生かし多くの方々から興味ある話題を引き出しておられ、度

ゲストに呼んでいただいたこともあり、よく相談している仲間とご紹介いただき感謝でした。計報に接し、百二十五歳まで生きると宣言されていたのになぜとの思いと、もともとやりたことがあったのに無念だったろうとの想いがめぐりました。

お通夜や本葬の時に、関西の音楽界の方々から社会に対して発言力のある楽壇人として日下部さんを失った今、代わる人はないのではとの声が多くあり、日下部さんのご功績の偉大さが語られていたことは忘れることはできません。ご意思を継ぐ若い方の出現を天上から見守っておられることでしょう。

ご葬儀でご出棺時



第2回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 記念パーティー 筆者善積氏(左)らと談笑する日下部氏

【日下部 吉彦さんプロフィール】
音楽評論家。朝日新聞記者を振り出しに、朝日放送音楽プロデューサー、ニュースキャスター、解説委員長などを歴任。関西合唱連盟会長、全日本合唱連盟理事、大阪音楽大学理事などを務めた。一九九二年に始まった「いすみホールランチタイムコンサート」では自ら企画・監修・トークを担当し、二〇一七年六月で百回を数えた。大阪国際室内楽コンクール&フェスタでは、第9回からフェスタ部門審査員長を、二〇一七年の第九回では審査委員長を務めた。享年九十歳。



グランプリ・コンサート
2017は、昨年開催された
第九回大阪国際室内楽コン
クールの第一部門(弦楽四重
奏)で優勝したアイズリ・クアル
テットです。アイズリ・クアル

前は少し緊張していました。
しかし彼女たちは個人での活
動やツアー経験も豊かで、四
人ともフレンドリーなことも
あつて、ツアーはとても楽しい
ものとなりました。グランプリ

テットは、現在ニュー
ヨークを中心に活動
している弦楽四重奏
団で、特徴は演奏曲
によつて第一・第二ヴァ
イオリンが入れ替わ
り、二つの違った個性
を持つクアルテットの
演奏を一度のコンサ
ートで聴くことができ
る、言わば一度に二度
おいしいクアルテット
です。また、アイズ
リ・クアルテットはこ
れまでのコンクール&
フェスタの中で、初め
て優勝した女性だ
けのアンサンブルで、
担当としてツアーの

リ・コンサートで実際に演奏を
お聴き頂いた方も、ひよつとす
ると演奏からそのような雰囲気
を感じられたのではないで
しょうか。
今年のコンサートツアーをあ
らためて振り返ってみると、ど
の会場も観客との距離がとて
も近いコンサートだったように
思います。もちろんメンバーに
二人の日本人がいて、曲間に二
人の日本語での話しがあつた
事もあるとは思いますが、そ
れ以外に今回のツアーの為に
用意された二つのプログラムに
は物語が設定されていたこと
が大きかったのではないかと思
います。それぞれのプログラム
(物語)にはそれぞれ題名が付
けられ、プログラムAはコン
クールの演奏したシューマン
の弦楽四重奏第三番を含む
「ウィーンより愛をこめて」。プ
ログラムBには、こちらもコン
クールで演奏したウィアンコの

リフトとベートーヴェンの大
フーガを含む「時空を超えた
孤高の旅人」と題名が付けら
れました。特にプログラムBは、
まるでタイムマシンに乗ったか
のように十二世紀から現代の
曲までを聴くことが出来る貴
重なプログラムとなりました。
全国各地で行われるグランプリ
リ・コンサートは、クラシック音
楽を生で初めて聴くお客様も
多い事から、この取り組みに
よつてお客様にとつてはとても
聴きやすいコンサートとなつた
のではないかと思います。実際
にお客様からは、「クラシックの
コンサート自体初めてだったけ
ど、楽しい二時間でした。」「ま
た聴きたいので、是非開催を
続けてください。」といった感
想を数多く頂戴しました。
私たちは二人でも多くの方
に、室内楽の素晴らしさを知つ
て頂くために活動しています
が、関係皆様のご協力がなけ



クワチュオール・ザイール

れば継続する事は出来ませ
ん。今回円滑に活動させて頂
きましたことに対し、ご協賛
いただいた各社、共催の日本テレ
ビ系列各放送局、また各地の
ホールの皆様のご尽力に改め
てお礼申し上げます。今年秋
には、グランプリコンサート
2018として、第九回の第
二部門で優勝したフランスのサ
クソフォン四重奏団「クワチュ
オール・ザイール」の全国ツアー
を予定しています。こちらも
是非ご期待ください。

平成29年度 第2回理事会開催



理事会

平成29年度第2回理事会が、2018年3月6日(火)ホテ
ルニューオータニ大阪で開催され、森会長の挨拶の後、
望月理事長が議長となり、平成30年度の事業計画並びに収支予算が審議さ
れ可決承認されました。また、平成29年度臨時評議員会の招集と議題、さらに
平成30年4月1日付の牧野立太常務理事の事務局長兼任が承認されました。
最後に堤剛音楽理事による「第10回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」に
向けての話がありました。

平成29年度 臨時評議員会開催



評議員会

平成29年度臨時評議員会が、2018年3月27日(火)ホテルニューオータニ大
阪で開催されました。望月理事長の挨拶の後、評議員の互選で牧野明次評議
員を議長に選出、先の理事会で承認された平成30年度の事業計画並びに収
支予算が可決承認されました。最後に平成30年2月1日付の牧野常務理事の
事務局長兼任の報告がありました。

2018(平成30)年度 助成金交付予定事業

2018(平成30)年度の助成金交付事業は1月26日(金)の選考委員会で厳正な審議の結果、申請総数18件のうち下
記の7件が選考されました。

事業名	申請者	開催地
1 プティ シンフォニーの競演	公益社団法人アンサンブル神戸 矢野 正浩	大阪 ムラマツリサイタルホール
2 古庭園・大人ライブ Vol.43 ベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲演奏会7	ながらの座・座 橋本 敏子	滋賀 大津市ながらの座・座
3 ICEP2018 訪問プログラム 報告コンサート	特定非営利活動法人ミュージック・シェアリング 理事長 五嶋 みどり	大阪 ザ・フェニックスホール 東京 ヤマハホール
4 Music Dialogue ディスカバリー・シリーズ 2018-19	一般社団法人Music Dialogue 大山 平一郎	東京 南麻布セントレホール 京都 京都国立博物館講堂
5 直方谷尾美術館室内楽定期演奏会 第31、32、33、34回	かんまーむじーくのおがた 渡辺 伸治	福岡 直方谷尾美術館
6 コロネット室内楽シリーズ「アンサンブル天下統一2018」	SPS株式会社 代表取締役社長 平井 弓子	愛知 岡崎市シビックセンター 「コロネット」
7 ベルギーの至宝・イザイ生誕160周年記念 「イザイ音楽祭ジャパン」福岡公演	日本イザイ協会 永田 郁代	福岡 北九州市立響ホール

〔選考委員〕 委員長 藤田 由之 (指揮・評論)
委員 青澤 隆明 (評論)
委員 小野寺 昭爾 (大阪フィルハーモニー協会)
委員 横原 千史 (評論) (敬称略、委員名50音順)

公益財団法人 日本室内楽振興財団(JCMF)について

目的:室内楽の水準の向上・普及を図るために、国際的な室内楽コンクール開催とともに、室内楽演奏会の開催や各種活動に助成等を行い、
もって我が国の芸術文化の発展と真の国際交流に寄与することを目的とします。

設立:1992年5月26日

主な活動:「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の開催(3年に1回) 室内楽の演奏会の開催
室内楽の演奏活動及び教育普及活動への助成 室内楽に関する調査研究
室内楽に関する広報(広報誌及びホームページ) その他目的を達成するために必要な事業

世界中に広がる「春の便り」 美しい景色を探しにいこう。

寒さに身を縮こませ寄り添いあう草木や動物、虫たちが
あたたかな陽気に誘われ、一步外へと踏み出します。
活気溢れる季節、自然の華やかさや美しさに目を奪われる様子に
まるで「生命の賛歌」を響かせているかのよう。

世界のあちこちから聞こえてくる
「春の便り」を探しにでかけませんか。

私たちJTBは、世界各地の感動スポットをご案内し
旅のお手伝いをいたします。



JTB西日本 海外旅行西日本支店

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8 (MPR本町ビル9階)
TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790
担当:有野 良一

公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

株式会社近畿大阪銀行
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
株式会社りそな銀行

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

野村證券株式会社
アサヒビール株式会社

サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

東洋紡株式会社
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
新日鐵住金株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

KDDI株式会社
西日本電信電話株式会社

株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
讀賣テレビ放送株式会社

(関連業種別50音順)

CONTENTS

インタビュー

室内楽は“合わせる”ことを目標にするのではなく、
自分に正直な音を奏でることが大切。
出席者:ヘーデンボルク・直樹
インタビューア:藤野一夫……………1

音楽の学び舎 同志社女子大学
伝統の京都から新しい音楽を発信する
椎名亮輔……………7

音楽文化の源
富山県高岡文化ホール
……………9

欧州弦楽四重奏界を支える人々

渡辺和……………11

日下部吉彦さんと室内楽フェスタ

善積俊夫……………13

「グランプリ・コンサート2017 アイズリ・カルテット」を終えて
日本室内楽振興財団グランプリ・コンサート担当 柳圭史……………15

JCMF NEWS……………16

日本室内楽振興財団支援企業……………17

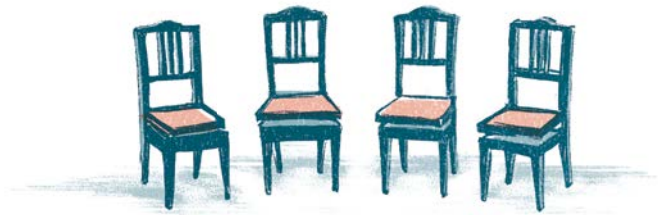
あ と が き

奏(SOU)は日本室内楽振興財団が、年2回(春・秋)発行している
広報誌です。第1巻から青山行雄・初代理事長の題字「奏」ととも
に発行を続け、次号で50号を迎えます。日本室内楽振興財団は、
設立から25年を経てこれからも音楽の原点といわれる室内楽の
振興に寄与して参ります。



●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内
TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198
URL <http://www.jcmf.or.jp>
Cover Design : Mié
VOL.49 平成30年4月27日



公益財団法人 日本室内楽振興財団